

京都大学	博士（地域研究）	氏名	高村（井上）満衣
論文題目	キゴマ州に生きる青少年の語り —ゆらぐタンザニア教育制度の活用と離脱—		
（論文内容の要旨） 本論文は、タンザニアのキゴマ州M区M小学校出身の青少年を事例として、朝令暮改的教育政策のもと、彼らが学校教育をどのように活用し、また離脱するのかを明らかにしたものである。序章ではまず、これまでのアフリカにおける学校教育への批判、タンザニアにおける学校教育の課題や政府の動きについて検討した。その上で、青少年の主体性を捉えるために、彼らの「人生」における実践と語りに着目し、学校教育を捉え直すという本論文の視座を提示した。 第1章では、タンザニアの教育制度と独立前から2024年にかけての教育政策の変容について概観した。つづく第2章では、調査対象としたキゴマ州M区について公的資料と聞き取り調査から概説をおこなった。 第3章と第4章では、学校のエスノグラフィーを描いた。まず、第3章において調査校、調査対象となる子ども、そして教師の概要を示した。第4章では、小学校における活動を子どもの視点から描いた。これまで教師と子どもは主従関係にあると指摘されていたが、子どもたちは教師との関係性を俯瞰し、教師から理不尽さを学び、自らの立場を遊びとして楽しむ創造的能力をもつことを明らかにした。また、子どもが中心的に運用する学校制度により、子どもの間で「選ばれるもの」と「選ばれないもの」といった社会の権力構造が再生産されることが示唆された。 第5章からは小学校で社会化した子どもたちの「人生」に焦点を当てた。第5章では、2017年に導入された制度による、小学校卒業試験の選抜機能強化を指摘した。それにより2018年の試験受験者は、慣習的に行われていた留年や転校、そして再受験という機会を失った。彼らは、国際社会やタンザニア政府が問題視する社会的弱者となった。しかし、実際には現在の状況を各自の方法で解釈し、徒弟制度の利用など様々な戦略をとりながら、「人生」を歩むことがわかった。 第6章では進学した青少年を中心に、就学に協力的な人物の有無によりそれぞれがどのような「人生」を歩むのかを記述した。協力者を得たひとは、小学校卒業試験に落ちたにも関わらず、「他人」として生きることによって就学継続を可能とした。もうひとは、国際社会が想像する「困難な状況に置かれた子」を演じ、ライフストーリーを「創作」することで就学継続していた。一方、協力者が得られず中途退学者となった者は、零細商人や父親として、また結婚を戦略的に選択する人といったそれぞれの「人生」を淡々と歩み続けていた。			

第7章では、青少年の語りから「人生を探す」という言葉の捉え方を把握した。また、それぞれが歩む「人生」についての語りのなかで学校教育がどのように利用されるのかについて考察した。まず、「人生を探す」とは様々な解釈があることが明らかとなった。そして、中途退学者は、就学期間を「人生」における自由時間と捉えていた。一方、就学者は学校教育を内面化し、国家の発展へ貢献することを目指すものや不確実な将来へ不安を抱く時間であると捉える者もいた。

終章では、以上の結果から3つの議論をおこなった。まず、タンザニアの国家はSDGsといった国際社会の影響を受け、欧米諸国が求める「教育の質の向上」を目指してきた。しかし、その結果として学校教育からの離脱者が増えるという逆説的なことが起こっている。次に、学校教育制度がタンザニアの社会経済の現状と乖離しており、ジェネラリスト的働き方をする早期離学者が大半の同国では、進学すればするほど脆弱な存在となる可能性を示した。そして、青少年たちは教育制度がゆらごうとも自身の「人生」を進んでいくことを指摘した。以上のことから、タンザニアで求められる質の高い教育とは何かを、青少年の「人生」と関連付けて再考することが求められると結論づけた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文が調査対象としたタンザニアは、アフリカの中でも教育熱の高い国として知られる。国家もさまざまな教育制度を展開してきた。しかし、これは教育に関する国際的なトレンドやドナーの意向を反映することが多く、タンザニアの将来にとって本当に必要な教育制度が整えられ、教育実践が行われてきているのかについては丹念な検討を要する。こうした状況で本論文は、まず文献等に基づいてアフリカおよびタンザニアにおける教育制度の変遷を整理するとともに、タンザニアのキゴマ州において学校内外における長期のフィールドワークを行い、調査対象である子どもたちの目線に寄り添いながら学校のエスノグラフィーを描き、さらに小学校で社会化した子どもたちのいまま進行情中の「人生」についての厚い記述と分析を行ったものである。

本論文は、以下の3点においてアフリカ地域研究に重要な貢献を行っている。

第1の貢献は、タンザニアの市井の人々の視点から近年の教育制度の変遷を記述・分析し、その評価を行った点である。教育開発の研究の文脈では、開発機関の目標に沿って活動が枠づけられ、評価が行われがちである。これに対して本論文は、タンザニアでは2010年代に鳴り物入りで採用された中等教育の無償化などを事例として、国際的に採用されている評価指標にはあらわれてきにくい教育の効果、とりわけタンザニアの健全な将来にとってどういった教育制度が求められるのかについて、深く考えさせる論考を展開している。SDGsで教育の質の向上の必要性がうたわれる中、こうした論考は貴重である。

第2の貢献は、調査地の学校における教育実践のダイナミクスを丹念に記述・分析したことである。生徒にリーダーや「モニター／モニタレス」といった役割が割り当てられ、教師が彼ら・彼女らを通じてなんとか秩序を構成、維持しようとするM地区の学校は、タンザニア社会の縮図のように映る。そうした学校の中では日々、悲喜こもごものドラマが繰り広げられている。本論文の記述からは、生徒と教師に代表されるアクターたちが何につまずき、悩み、それを解消しようとしているのかが臨場感を持って伝わってくる。筆者は、研究に対する強いモチベーションと研究対象に対する深い共感力をもって、そうした学校を舞台としたドラマをつづることに成功している。

第3の貢献は、コロナ禍の時期を挟んだ長期間にわたる縦断的な調査から、当初は小学校の生徒だった子どもたちが大人への階段を上っていく過程を生き活きと描き出したことである。筆者の強いモチベーションと深い共感力は、ここでも大いに活かされている。インフォーマントたちが語るライフストーリーは、典型的なサクセス・ストーリーではない。むしろ、彼ら・彼女らは失敗し、道に迷い、求めていた成功が得られずに傷ついている。しかし、筆者はそれでも前を向いている彼ら・彼女らに寄り添う。そこでは、フィールドで展開されてきた個々人の成長とタンザニアの社会の特徴、さらには筆

者自身の「人生」が呼応し合っているように感じられる。本論文で用いられている在地の概念や分析概念をさらに吟味していくことで、筆者の地域研究もより深化していくことが期待される。

このように本論文は、タンザニアの教育制度・実践についての新しく、かつ重要な事例研究を行うことを通じて、アフリカ地域研究に優れた学術的貢献を行った。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2025年1月28日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。